

よって、突如日常性のヴェールが剥がされてしまうのであろう（清矢一九九七）。一九九九年初春における筆者自身のフィールドワークでも少しずつ感じ始めたのだが（宮内一九九九a）、「沖繩本島」と呼ばれる現在は琉球弧の中心となっている島と、その周辺の島々との文化にはたしかに差異がある。エスニシティに焦点を絞るならば、その差異にも鋭敏であるべきではないだろうか。つまり、筆者が提起した「琉球系ブラジル人」という呼称も妥当かという問題は当然のごとく生じよう。「沖繩系ブラジル人」や「宮古系ブラジル人」や「八重山系ブラジル人」といった呼称も想定できよう<sup>(20)</sup>。しかし、このようなへ呼称の微分化は際限がない。調べれば調べるほど、島による差異が現われていく（気づいていく）ことだろう（逆に積分による新たなカテゴリーも提起できようが）。さらには、一つの島の内部も同一色に塗り固められているわけでもない。しかし、当時広田氏に対して筆者はあえて「琉球系」を提起した。たとえ、島々で異なっていようと、「日本」というカテゴリーでまとめてしまうのはきわめて乱暴であると思ったからである。「日系」という呼称には帝国主義の残滓さえ感じさせる。過去の踏襲以外に、強韌でかつ生産的な理由が存在しないならば、「日系」ではなく「琉球系」という呼称が用いられるべきではないかと考えていたからだ<sup>(21)</sup>。今にしてみれば、それは性急で乱暴な言いがかりだったかもしれないし、筆者自身の個人的な思い入れによって他者自身が用いるへ呼称の変更を促すこと、さらには「当事者」ではない者によるへ呼称の変容行為のはらむ暴力性に気づくに至った。ただ、このように、へ呼称においては歴史と現状の分析に伴い、変容や移行の可能性を模索する道も一方で準備される必要があるのではないかとも思われる。

以上のことを鑑みると、前節で触れた自らが用いる総称である「在日朝鮮人」という呼称も果たして妥当であるのかという疑問が生じてくる。その一例として、原尻英樹氏の大阪府生野区の分析がある。原尻氏は、生野区在住の済州島出身者の歴史を描くことによって、既存の「在日朝鮮人」研究に見られる、検討されぬまま繰り返され続けている言説を批判している（原尻一九九五）。そこで、彼は「日本在住済州島人」という呼称さえ用いるのである。さらに、先に記した広田氏の行程と同じく、原尻氏は済州島を訪れてフィールドワークを行ない（現在も済州島のことばを駆使しつつ

行なっていると聞く)、「済州島人のネットワークコミュニティ」という独自の観点から「済州島人」の海を越えた移動の足跡を記している(原尻一九九六、同一九九八aなど)。

このように、〈呼称〉には終着点はないように筆者には思える。私たち研究を行なう者が調査研究を続ける限り、実際に〈呼称〉は更新されることがなかったにせよ、私たち一人ひとりの中ではずっと揺れ続けるのだろう。少なくともエスニシティ研究を行なう者であるならば、「最初に〈呼称〉ありき」として、その〈呼称〉に即した予定調和的な「物語」を紡ぎ出すことだけは避けなければなるまい。自戒の意を込めて付け加えるならば、結果的にこのようなすでにあらかじめ決められた物語の産出に荷担してしまうということは、事実として数多の生身の人々に出会っていたとしても、実は〈他者〉との「出会い」を経験していないと言えるかもしれない。

## おわりに

本章では、筆者の素朴な疑問に端を発した、きわめて初歩的だと見なされる問題を改めて提示してきた。すなわち、筆者自身は総称としては「在日朝鮮人」という呼称を用いているが、果たしてそれは妥当な〈呼称〉なのかという非常に個人的な疑問を出発点に、実際の調査研究のプロセスをたどりながら、〈呼称〉の選択・非固定性・更新という三つの位相の異なる問題に区分した上で改めて問い直す試みを行なった。<sup>(23)</sup>さらに付け加えるならば、本章は、対面調査という、調査を行なう者は〈調査者〉という鏡で守られた舞台装置の中の特殊な問題の指摘であったとも言える。

以上、本章で述べてきたことを再び繰り返してみたが、結局、〈呼称〉にまつわる問題には答えは出ない。万人にとつての〈正しい呼称〉などは存在しないと云えるだろう。なぜなら、本章で述べてきた通り、エスニシティにまつわる〈呼称〉は当該時点における〈呼ぶ者〉と〈呼ばれる者〉との関係性が色濃く反映されているからである。つまり、〈呼ぶ者〉と〈呼ばれる者〉の関係性によって〈呼称〉は決められ、そこに国家やマスメディアあるいはアカデミーといった権力が関与することにより、当該〈呼称〉は持続することにもなる。ここで重要なのは、〈呼ぶ者〉が〈呼ばれる者〉

の吟味を入念に行なつたからといって、最終的に「正しい呼称」などが生み出されることはないということである。これは一種の幻想であろう。種々の位相による関係性によって決定づけられているがゆえに、「呼ぶ者」の「呼ばれる者」へのまなざしにはすでに「呼ぶ者」の価値が内包されてしまつてゐることを忘れてはなるまい。いくら「呼ばれる者」に対して中立に接しようとしても、すでに内面化された社会認識の枠組みはなかなか消えることはない。そこで、「呼称」を選択し、あるいは生み出す「呼ぶ者」自身に対しても、同様の吟味がどうしても必要とならう。片方のみの吟味は単に片面の詮索に過ぎない。つまり、ここでは「自己言及的」であり「自己反省的」な態度が必要となるのである。

例えば、自らが「日本人」であることに疑問すら感じたことのない人が他者の「呼称」を決定するということは、最初から論旨の展開は決められておるとしか思えない。誤解は可能な限り避けたいのだが、自らへの言及は単なるナルシズムの吐露や自己顕示欲の賜物ではない。他者の「呼称」の（暫定的であれ）決定行為は、自己への言及なしには不可能だと考えられるからである。もし、エスニシテイにまつわる調査研究に際して、以上のような問題に出会つたことがないならば、それは単に採集した昆虫を陳列棚に並べていたのとまったく同じ作業をしていたことになるのかもしれない。

最後に、再び当初の問いに立ち戻らう。つまり、私そして私たち一人ひとりには「あなた方のことをどのように呼べばよいのだろうか」という問いが残されたままである。この問いは、現代を生きる誰もが背負うことになる、喉元に突きつけられた問いでもあらう。現代は研究者のみが「正しい呼称」を決定できるような、研究者にとつての「幸福な時代」ではない。かつての明治政府が「境界線」を恣意的に創出したり移動させたりしたのとまったく同様の原理に基づいた行動は、時代錯誤も甚だしいことである。少なくとも、意図的か非意図的にかかわらず、誰もが「呼称」を賭けた闘争に参加している。このことを前提にして、私たち研究する者は「呼称」を用いるべきであらう。そして、いかなる「呼称」であらうとも、その「呼称」を用いたときには、有無を言わず、フィールドにたたずむ立派な当事者の一人となつてゐるのである。

筆者の立場と言えば、惰性による（呼称）の無自覚な使用はとりやめようという非常にオーソドックスで、陳腐でモラリスティックな主張にとどまる。研究者に限っても、自らの思想やこれまでの研究成果に基づいて、自らの用いるべき（呼称）を決めているはずである。いや、自ずと決まるといふ表現の方が近いかもしれない。それを用いる「責任」はたしかに厳密には取れないかもしれない。しかし、改めて言うまでもないことだが、「責任逃れ」や「責任放棄」を自らの研究の出発点にだけはしてはならない。「土佐源氏」とされた一人の男性がそうであったように、私たち一人ひとりも時代の証言者であるのだ。そのことに自覚的でありたい。

#### 【付記】

本章は、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）および研究奨励金（一九九四年四月―一九九七年三月および一九九八年一月―二〇〇一年三月）による研究成果の一部である。この制度によって、筆者は当時生活していた北海道から石垣島までの複数の地域におけるフィールドワークが可能となった。この制度に心より感謝したい。

#### 【注】

(一) 本章は、一九九九年二月に新幹社から発行された「コリアン・マイノリティ研究」第三号に掲載された採択論文「私はあなたの方のことをどのように呼べば良いのだろうか？ 在日韓国・朝鮮人？ 在日朝鮮人？ 在日コリアン？ それとも？——日本のエスニシティ研究における（呼称）をめぐるアポリア」（五二―八頁）にわずかな修正を加えたものである。私たちの状況は日々刻々と変化している。この拙稿を発表してから五年以上の月日が過ぎたいま、状況は変わり、日本社会におけるエスニシティに関する新たな研究も次々に発表されている。本来ならば、新たな研究を血肉化して大幅な加筆修正をすべきであろうが、それは今後の宿題にさせていたいただきたい。この拙稿は発表当時、エスニシティ研究の領域ではまったくといって良いほど無視されたが、大阪大学の植田晃次氏などをはじめとして、「新しい社会言語学」の領域において引用していただいた。執筆当時の日本社会の文脈と密接に絡み合った拙稿に対してメスを入れることはせずに、ほぼ発表当時の姿のまま、本書に収録させていただいた。

最後に、本書への転載を認めてくださった在日朝鮮人研究会ならびに新幹社の皆様には心より感謝申し上げます。

- (2) それは資料に対する（視線）の問題であるという言い方も可能であろう。このとき、カルロ・ギンズブルグ氏による方法論が非常に参考になると筆者には思われる。特に彼の著作である「チーズとうじ虫」における「はじめに」は、そのような視角の研究のマニフェストであろう（Ginzburg 1976）。ただし、彼をはじめとした「ミクロヒストリア」研究に対する批判には、上村（一九九四）などがある。

- (3) 彼はいわゆる「エリート」であり、階層の高い知識人の自己言及ではないか。彼と類似する出自の人たちの多くは、今なお容易に海外に行けるような環境にはなく、自らのことを客観視して考える時間的余裕もないのではないか。そのような批判は当然なされよう。だが、現代社会の特徴の一つである情報化・国際化のとどまることを知らぬ大波（換言するならば、世界規模の資本主義一元化の波）の中では、本文のような疑問が頭をもたげること、そう珍しい、いわば明治時代の知識人の嘆きに属するような、ある種特殊なことではないように思われる。

- (4) このようなことは、ごく「当たり前」のことであつて、わざわざ取り上げることに首を傾げる方も多からう。だが、ごく「当たり前」のことでは決してない。一九九八年二月五日にホテル・アウイーナ大阪で行なわれた一九九八年度の「在日朝鮮人研究会」大会のシンポジウム「在日朝鮮人教育から多文化共生教育への回路を求めて」の席上、パネリストの一人であつた筆者は資料としてある出版関係の新聞のコピーを配布した。その紙面には拙稿が収められている共著者の紹介がなされてきたのだが、拙稿の紹介の文中には「在日北朝鮮人」という呼称が用いられていた。筆者は拙稿の中で一度もそのような呼称を用いてはいないし、さらにかつて今まで一度も用いたことがない。これは、この文章を書いた記者自身による呼称である。この呼称を筆者が用いたと誤解されるような当該紙の記述には憤りを覚えるが、冷静にこの文面を見つめ直してみると、当該記事を担当した記者が既存の呼称を知らなかったからではないかと思われる。ひいては、「在日朝鮮人」の存在を知らなかったからではないかとも考えられる。出版関係の現場においても、このようなことが実際に生じている。遠い昔話ではない。この新聞は一九九八年一〇月八日に発行されたものである。筆者が生活していた北海道においては、「在日」ということばさえ聞いたことがないという人も少なくはない。このような事実にも私たちは目を向ける必要があるのではないだろうか。

- (5) 例えば、福岡・辻山（一九九一a、一九九一b）あるいは福岡（一九九三）、谷（一九八九、一九九二、一九九三、一九九五、一九九六）、竹ノ下（一九九九）など。もともと、谷氏は最新の記述においては「在日朝鮮人」という呼称も用いている

(谷一九九九)。

(6) 原尻氏の指摘により、筆者はこのことを初めて知った(原尻一九九八b、一五六頁)。ちなみに、朝日新聞紙上において一九七六年二月二十七日から四月二十五日までにはわたり、「65万人―在日韓国・朝鮮人」というタイトルの連載が行なわれたが、これがマスメディアにおいて日本国内中に対して、この〈呼称〉が用いられたきわめて初期の例だと思われる。徐氏は、このタイトルは自らが提案したものだという。

(7) なぜ「韓国」が先に表記されるのか。最初の提唱者と自認する徐氏本人による説明は、①近代の統一国号が「大韓帝国」であったこと、②韓国の人口のほうが多いこと(約2:1)、③韓国のほうが日本に近く交流も頻繁であるということである(徐一九八二b、九六頁)。

(8) 学会誌には「在日韓国人・朝鮮人」という呼称も登場していた(渡辺・大森一九七三)。

(9) とは言え、この〈呼称〉が用いられなくなったわけではない。例えば、原尻(一九八六、一九八九、一九九三)、伊地知(一九九四、一九九六、一九九八)、倉石(一九九六)、金(一九九八)など。

(10) しかし、状況は変わってきているのかもしれない。例えば、「在日韓国・朝鮮人」という〈呼称〉をもっとも早い時期に用い始めたと思われる朝日新聞社であるが、最近変化が生じている。日本からペルーへの送金業務を代行していた商社が銀行法違反の疑いで家宅捜索を受けた事件の大見出しは「在日社会 寝耳に水」というものであった(朝日新聞朝刊北海道版一九九九年九月二〇日14版29面)。担当記者は「在日ペルー人社会」の略称として用いたつもりのようなのだが、少なくとも筆者はその大見出しを見て、そのようには理解しなかった。その後本文に目を通して、その用い方に驚かされた。

(11) 徐氏の還暦を記念して編まれた著作には、徐氏の過去の論稿も収められているのだが、彼はかつて自らが「在日韓国・朝鮮人」と記していた箇所を、現在の彼による呼称である「在日韓朝鮮人」に修正している。一見すると以前より一貫して、そのような呼称を用いていたという錯覚を起こさせる(徐龍達先生還暦記念委員会編一九九三、七五四―七八〇頁)。

(12) ただし、特定の個人について記述あるいは口述する場合は、その個人の生き方および思想に基づいた本人自身が提唱する〈呼称〉を用いるようにしており、これはあくまでも総称についてのみに限定されることを強調しておきたい。

(13) だが一方で、「この用語を『分断固定化』とみる一部の教条主義者に迷わされてはならず、平和統一への着実な一歩と見るべきであろう」(徐一九八一、三三三頁)という主張もある。

(14) このような筆者の非中立的な立場に対しては批判の声が必ずや挙がるであろう。筆者は中立的であろうと努めてはいるが、

多くの「在日朝鮮人」の人たちから筆者自身が「日本人」であると見なされることからは逃れられることはなく（同時に「男性」であること、「研究者」であることも）、その一点において中立的な立場が果たして存在するのかが疑問である（宮内一九九四、同一九九八c）。

まさにベラー氏が述べるように、「分析者は自らが分析している全体の一部である。分析者は自らの問題を立て、得た結果を解釈するにさいし、自らの経験や自らの属する研究共同体に依拠しているのであり、そして研究共同体自体は特定の伝統や制度のなかに置かれている」のである（Bellah et al. 1985 = 1991 訳書三六三頁）。このことには可能な限り、自覚的でありたい。

(15) 抑圧する道を選ぶことは、「他者」を「石化 (petrification)」するという行為であるという表現も可能かもしれない (Lang 1980)。

(16) 筆者は一九九六年春に、広田氏本人に横浜市一円を実際にまわりながら解説していただいた。その上、「日系人」たちにとつての「緊留点」であると広田氏が見るブラジル料理店Bにも連れて行ってくださり、氏の一連の研究のキーパーソンでもある経営者の女性を紹介してくださった。寿町におけるフィールドワークも含め、このような貴重な経験をさせていただいた広田氏には深く感謝したい。フィールドワークの隆盛と共に、「フィールドの閒い込み」が静かに進行するとおぼしき現在においては、このような広田氏のオープンな態度には敬服せざるを得ない。またその折りには、横浜市を中心に「日系南米人」の子どもたちの研究を行なう藤原法子氏も同行していただき、ご教示をいただいた。同じく感謝したい。

(17) 後に、日本社会教育学会・日本教育社会学会第二〇回東北・北海道研究集会における報告「日本のエスニシティ研究における〈名称〉をめぐる問題」(一九九六年五月二五日、仙台市戦災復興記念館)で同様の主旨を提起したことがある。なお、この報告時には多少の誤解が見られた。本章ならば誤解は十分に避けられることと思われるが、活字の戯れから生じた形而上学的な考察を企図したものではないことは予め断っておきたい。また、報告においては、マスメディアから一方的に「アイヌ」として紹介されていた一人の女性についても触れたが、本書では触れず、別の機会に譲ることとする。ちなみに、「アイヌ」に関する〈呼称〉については、『民族学研究』第六三巻四号に収められている「人種・民族に関するアンケート集表」(四六二―四六三頁)に簡潔に示されている。

(18) 本章が横浜や沖縄島および周辺の島嶼部のフィールドワークの記述に多くを割かれ、筆者自らの居住地であった北海道のエピソードがあまりないことに対して首を傾げる方もおられよう。付加すれば、筆者自身の一連の研究成果は、北海道在住

の外国籍の子どもたちについて書かれたものが多い。以前筆者は「北海道に住んでいるのに、どうしてアイヌを調べないのか？」と関西在住のある文化人類学専攻の大学院生に指摘されたことがある（本当は「アイヌをやらないのか？」という何とも耐えがたい表現だったのだが）。このような北海道「アイヌ」という単純な図式的な外部の視線の解毒こそが、北海道に居住する研究者としての一つの役割とも言えるのかもしれない。

(19) この場合、筆者と彼／かの女たちとの間に、公共機関や放送局などが介在したならば、より一層の誤解が広がる恐れもある。つまり、そのような状況においては、「善意」からのサービスが心ならずも過剰な演出となって表出されてしまい、未知の情景に心を躍らせている「素直な」訪問者たちは何のためらいもなくその姿を鵜呑みにしてしまう可能性を大いに内包している。近年「観光」が一つの「重宝な」テーマとして発見された感があるが、この領域では戦略的に演出された「目画像」を演技するマキャベリア的な個人像が共有された前提であるかのように思われる。この種の文脈とは異なった、功利的な「打算」とは距離を持つ、ささやかな演出がはらむ微妙な問題にも目を配る必要があるだろう。

(20) 本章の冒頭では「長州人」というカテゴリーの存在を示唆したが、この「ブラジル人」という呼称を自明のままフリーズさせたままでよいのかという問題提起もされよう。この「ブラジル人」というカテゴリーを今一度分析する必要がある。ちなみに、広田氏は当初「日系人」というカテゴリーを用い、その後は「日系南米人」という呼称を用いていた（広田一九九四、同一九九五）。

(21) 筆者の調べた限りにおいては、筆者とは非常に近い意図から、新原道信氏が「沖縄系ブラジル人」という呼称を用いている。

「本稿の中では、沖縄という言葉が様々な形で登場する。沖縄県の住民、沖縄で生まれ育った人々、移民や移住によって郷里を離れたが沖縄をルーツとする人々、広い意味での沖縄人（ウチナンチュ）を含み込んで考えている。ここで、沖縄系ブラジル人といったのは、ブラジル（たとえばサンパウロ州）の日系人社会の中で、出身地や世代による差異化が存在していることを表す意図がある。南米への移民の中でも、沖縄からの移住者は相対的な多数派を形成している。」  
（新原一九九六、六四頁）

このような意図から、彼は「沖縄系ブラジル人」という呼称を用いている。しかし、新原氏のこの論文には原注とは別に脚注が付けられており、その上で「脚注を付けるにあたっての付記」が添えられている。ここでは「不適切な表現についてのご指摘を受け、とりわけ不適切だとされた部分については削除し」たことなどが記されていた。不適切な表現がいかなる

ものだったかは、筆者には計り知れない。ゆえに、以下は想像の域を出るものではないが、「○○人」といった呼称をめぐる意見の対立があったのではないかと筆者には思われるのである。というのも、筆者自身がカテゴリーをめぐる対立の場面を何度も経験してきたからである。つまり、本文にもあるように、あるカテゴリーを用いることによって、カテゴライズされた人たちは白らの思想や生き方にかかわらず、ある種のカテゴリーに無理やり押し込められてしまう。だから、あるカテゴリーに押し込められた当事者は、それが不本意ならば、カテゴリーに押し込んだ側に対して、「異議申し立て」の行為を行なう場合がある。のみならず、へ押し込む―押し込まれる」という関係にある両者がある種のカテゴリーに一時の妥協点を見出しても（そのような幸福な状態はほとんどあり得ないのだけれども）、第三者が「異議申し立て」を行なう場合もあり得るだろう。例えば、国家という「共同体」の強さを誇示する場合に、ある種のカテゴリーの存在が容認できぬという場合だ。もしかすると、当該地域においてもこの種の意見の対立が生じていたのかもしれない。

(22) 濟州島のことばは、朝鮮半島のことばとは異なっていると聞いた。筆者は、北海道の大学及び大学院に留学している自然科学を専攻する大韓民国からの留学生と一緒に飲食した場面で、彼ら（たまたま男性ばかりだった）から濟州島と自らの母国の違い（濟州島も大韓民国の一部なのだが）の強調をよく耳にした。例えば、「濟州島のことばはわからない」「文化が違う」「母国とはちよつと違う地域」などという内容だった。ここから朝鮮半島出身者（とくにエリート層）による濟州島に対する「オリエンタリズム」が現在も存在している可能性がうかがえる。

(23) 本章を終えた後も、筆者は総称としては「在日朝鮮人」という呼称を用いている。「はじめに」において、本章はゴフマンの言う「*a virtual social identity*」にかかわる側面のみ限定されると述べたが、たとえ「*virtual*」であると断ったとしても、その「呼称」が実体としてひとりで機能し始め、「呼ばれた者」を身体のすみずみまでも縛りつけていく可能性は否定するものではない。さらに言えば、この「呼称」による「境界線」から排除されたと感じる人たちのやるせなさや失望感として絶望、逆に「呼称」によって一括りにされてしまうことに対する嫌悪感や抵抗感については、本文ではほとんど触れることができなかった。

そもそも本章は筆者である「私」の素朴な疑問に端を発していると書いたが、本章の副題にある「私」とは何者なのか。「私」は、数多のエスニック・グループの亡骸を包含した「日本人」という呼称で表わされている集団の一員として見なされていると記した。だが、ここに居心地の悪さを感じたとしても、ここから抜け出す術を知らないし、異議申し立てをしようにも提起すべき「呼称」を持たないし、その「呼称」を創出することすらできなくなっている。「私」は「日本人」として一

括りにされることに対して、たしかに抵抗感や嫌悪感を覚える。だが、自らはコスモポリタンであるとうそぶくこともできない。先の原尻氏は、岡氏とほぼ同じ年齢の韓国籍で日本国生まれの男性の生活史を記す中で、民族学校ではなく「日本の学校」に通学する「在日朝鮮人」の子どもの心理的な傾向を述べた後、このように続けている。

「他方、「日本人」の子供たちは、「自然に」自己と他者の分類規則を内面化し、権力関係によっておとしめられている「他者」の「痛み」がわからない」「不幸」を背負っていると云える。」（原尻一九九六、二二二頁）。

それは子ども時代の一時期のことだけではなく、（私たち）はそのような「不幸」を背負い続けているのかもしれない。つまり、他者の分類作業のみに没頭し、その結果他者の選別作業には長け、一方で自らが何者であるかを問う思考回路が退化してしまったのかもしれない。そこから抜け出すことのできない苛立ちや苦しみすらも感じることでできなくなっているのであるならば、「日本人」という刻印は根深く刻まれて、すでに身体の一部になってしまっているのかもしれない。

〔引用および参考文献・資料〕

伊地知紀子 一九九四 「在日朝鮮人の名前」明石書店

伊地知紀子 一九九六 「生きられる歴史・紡がれる言葉―濟州島と大阪でのフィールドワークから」、『人文論叢』（大阪市立大学大学院文学研究科）第二五巻、二九―四四頁

伊地知紀子 一九九七 「生活共同原理の可能性―韓国・濟州島・杏源里社会の事例から」、『ソシオロジ』二二九号、一三―三九頁

伊地知紀子 一九九八 「営まれる共同性―日本で生まれた濟州人の親睦会」、『在日朝鮮人史研究』第二八号、緑蔭書房、一二―一三七頁

上村忠男 一九九四 「神は細部に宿るか―ミクロヒストリア考」、『歴史家と母たち―カルロ・ギンズブルグ論』未來社、一〇六―一五五頁

植村幸生 一九八六 「在日コリア人の民間信仰における儀礼と音楽」（東京芸術大学修士論文、未公表）

小熊英二 一九九五 「単一民族神話の起源―日本人の自画像の系譜」新曜社

小熊英二 一九九八 「日本人」の境界―沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで」新曜社

金泰泳 一九九八 「アイデンティティ・ポリテイクス超克の（戦術）―在日朝鮮人の子ども会活動の事例から」、『ソシオロ

ジ」一三二号、三七五—四頁

倉石一郎 一九九六 「歴史のなかの(在日朝鮮人アイデンティティ)——ライフ・ヒストリーからの一考察」、『ソシオロジ』一二二

六号、五一—六七頁

佐野真一 一九九六 「旅する巨人——宮本常一と洪沢敬三」 文芸春秋

清矢良崇 一九九七 「社会的構成物としての調査——よそ者」 論の視点から」、北澤毅・古賀正義(編)『社会』を讀み解く技

法——質的調査法への招待」 福村出版、一六〇—一七六頁

杉原達 一九九八 「越境する民——近代大阪の朝鮮人史研究」 新幹社

徐龍達 一九八一 「近代韓国・朝鮮經濟年表」付、「韓国・朝鮮」論の提唱について」、『桃山学院大学經濟経営論集』第二三卷

第三号、三一七—三六〇頁

徐龍達 一九八二 a 「NHK講座は「韓国・朝鮮語」で」、『文芸春秋』3月号、文芸春秋、八四—八五頁

徐龍達 一九八二 b 「平和統一への一歩はまず用語から」、『朝日ジャーナル』vol. 24, No. 31, 朝日新聞社、九三—九六頁

徐龍達 一九八三 a 「統一用語「韓国・朝鮮語」のすすめ」、『朝鮮研究』二二七号、日本朝鮮研究所、四四—五二頁

徐龍達 一九八三 b 「論壇——韓国・朝鮮語」を統一用語に」、『朝日新聞』(3月15日朝刊5面)

徐龍達 一九九二 「原爆慰霊碑は「韓朝鮮人」で統一を」、『毎日新聞』(9月11日朝刊5面)

徐龍達先生遷居記念委員会(編) 一九九三 「アジア市民と韓朝鮮人」 日本評論社

田口純一 一九八四 「異民族・異文化の問題とマスコミ」、磯村英一・福岡安則(編)『解放社会学及書1 マスコミと差別問

題』明石書店、一五九—一七七頁

竹ノ下弘久 一九九九 「多文化教育とエスニシティ——在日韓国・朝鮮人集住地区を事例に」、『社会学評論』一九九六号、四五—六

二頁

谷富夫 一九八九 「民族関係の社会学的研究のための覚書き——大阪市旧猪飼野・木野地区を事例として」、『広島女子大学文学

部紀要』二四号、六三—八六頁

谷富夫 一九九二 「エスニック・コミュニティの生態研究」、鈴木広(編)『現代都市を解説する』ミネルヴァ書房、二六〇—二

八三頁

谷富夫 一九九三 「都市国際化と「民族関係」、中野秀一郎・今津孝次郎(編)『エスニシティの社会学——日本社会の民族的構

成」世界思想社、二二二五頁

谷富夫 一九九四 「共生の原風景」、Network for Ethnic and Migration Studies (編) [NEMS NEWSLETTER] 14・15合併号

谷富夫 一九九五 「在日韓国・朝鮮人社会の現在―地域社会に焦点をあてて」、駒井洋 (編) 『講座外国人定住問題 第二巻

定住化する外国人』明石書店、一三三二一六二頁

谷富夫 一九九六 「民族関係」のエスノグラフィ―在日韓国・朝鮮人社会と日本人社会」、八木正 (編) 『被差別世界と社会

学』明石書店、七九九五頁

谷富夫 一九九九 「民族関係のフィールドワーク」、『ソシオロジ』一三五号、一〇五―一三三頁

寺岡伸悟 一九九五 「理論・フィールド・調査論」、『ソシオロジ』一三三号、一四三―一四八頁

新原道信 一九九六 「境界のこえかた―いくつものもうひとつの横浜へとせまるために」、都市研究会 (編) 『国際文化都市ヨ

コハマの再生に関する調査報告―横浜市における多文化ネットワークの形成』横浜市海外交流協会、五三三―六五頁

野入直美 一九九六 「在日コリアンの子どもたち―生活史調査に見る仲間形成」、谷富夫 (編) 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人

のために』世界思想社、一三四―一五八頁

原尻英樹 一九八六 「在日朝鮮人のエスニシティ―筑豊A地区の事例より」、『民族学研究』五一卷三号、二七五―二八九頁

原尻英樹 一九八九 「在日朝鮮人の生活世界」弘文堂

原尻英樹 一九九三 「在日朝鮮人研究における〈実践倫理〉の要請」、中野秀一郎・今津孝次郎 (編) 『エスニシティの社会学―

日本社会の民族的構成』世界思想社、一三〇―一四五頁

原尻英樹 一九九五 「つくりかえられ生産されるドラマ―生野に住む『日本人』と『朝鮮人』」、ほるもん文化編集委員会 (編)

『ほるもん文化』5 在日朝鮮人民族教育の行方』新幹社、一〇五―一三三頁

原尻英樹 一九九六 「日本敗戦後の在日朝鮮人―濱州島人の生活史」、原尻英樹・六反田豊 (編) 『半島と列島のくにくに―日

朝比較交流史入門』新幹社、一七九―二四四頁

原尻英樹 一九九七 「日本定住コリアンの日常と生活―文化人類学的アプローチ」明石書店

原尻英樹 一九九八 a 「国境をこえる『民族』―濱州島人のネットワークコミュニティ」、『世界の民族―『民族』形成と近

代』放送大学教育振興会、五四―七〇頁

原尻英樹 一九九八 b 「在日」としてのコリアン』講談社

- 広田康生 一九九四 「日系人家族の生き方」、奥田道大・広田康生・田嶋淳子「外国人居住者と日本の地域社会」明石書店、一九二―二五七頁
- 広田康生 一九九五 「エスニック・ネットワークの展開と回路としての都市」、奥田道大(編)「21世紀の都市社会学」2 コミュニティとエスニシティ」勁草書房、一九二―三三九頁
- 広田康生 一九九七 「エスニシティと都市」有信堂高文社
- 福岡安則 一九九三 「在日韓国・朝鮮人」中央公論社
- 福岡安則・辻山ゆき子 一九九一 a 「同化と異化のはざままで―「在日」若者世代のアイデンティティ葛藤」新幹社
- 福岡安則・辻山ゆき子 一九九一 b 「ほんとうの私を求めて―「在日」二世三世の女性たち」新幹社
- 福岡安則・金明秀 一九九七 「在日韓国人青年の生活と意識」東京大学出版会
- 藤井幸之助 一九九九 「多言語社会ニッポン―朝鮮語①」、「ことばと社会」編集委員会(編)「ことばと社会」一号、三元社、一四〇―一四三頁
- 宮内洋 一九九三 「札幌市における「在日朝鮮人」女性のネットワークと「共生」」Network for Ethnic and Migration Studies (編) [NEWS NEWSLETTER] 8号
- 宮内洋 一九九四 「被調査者」とは誰か? (調査者)とは誰か?―日本におけるエスニシティ研究のなかで」、第42回北海道社会学会大会報告レジュメ
- 宮内洋 一九九五 「北海道における外国籍園児の現状―幼稚園に対する聞き取り調査をもとに」、『北海道大学教育学部紀要』六八号、一七七一―一九〇頁
- 宮内洋 一九九七 「外国籍園児が在籍する北海道の幼稚園」、『子ども学』一七号、ベネッセコーポレーション、一一六―一二三頁
- 宮内洋 一九九八 a 「外国籍園児のカテゴリ化実践」、山田富秋・好井裕明(編)「エスノメソドロロジーの想像力」せりか書房、一八七―二〇二頁
- 宮内洋 一九九八 b 「韓国・朝鮮」籍の子どもが通う日本の幼稚園―エスノグラフィ的記述におけるひとつの試みとして」、志水宏吉(編)「教育のエスノグラフィ―嵯峨野書院、一五二―一七二頁
- 宮内洋 一九九八 c 「フィールドワーク」の失敗と成功」志水宏吉(編)「教育のエスノグラフィ―嵯峨野書院、一七二―一

宮内洋 一九九九 a 「沖縄県離島部における幼稚園生活のエスノグラフィの覚え書き」、『北海道大学教育学部紀要』七八号、一一一―一四六頁

宮内洋 一九九九 b 「多文化保育・教育」とクラス編成」、『保育学研究―特集・幼児の多文化教育』第三七卷第一号、日本保育学会、三五―四二頁

宮本常一 一九五九 a 「土佐源氏・年よりたち五」、『民話』第一号、未來社、三一―三九頁

宮本常一 一九五九 b 「土佐辯原の乞食」、『日本残酷物語 第一部 貧しき人々のむれ』平凡社、九三―一二頁

宮本常一 一九八四 「土佐源氏」、『忘れられた日本人』岩波書店、一三一―一五八頁

安河内恵子 一九九八 「いよいよサンプリング」、森岡清志(編)『ガイドブック社会調査』日本評論社、一二五―一四四頁

李孝徳 一九九九 「内なる国境の散文の日々(1)」、『週刊読書人』第三二八二号(2面)

渡辺正治 大森元吉 一九七三 「広島市における朝鮮人移民の文化変容」、『民族学研究』三七卷四号、三〇四―三〇五頁

Bellah, R. N. et al. 1985, *Habits of the heart: Individualism and commitment in American life*, University of California Press. (島

幽進・中村圭志(訳) 一九九一 「心の習慣」みすず書房)

Ginzburg, C., 1976, *Il formaggio e i vermi. Il cosmo di un mugnaio del '500*. Einaudi. (杉山光信(訳) 一九八四 「チーズとウ

じ虫―16世紀の「粉挽屋の世界像」みすず書房)

Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*. Doubleday. (石黒毅(訳) 一九七四 「行為と演技―日常生活にお

ける自己呈示」誠信書房)

Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. Prentice-Hall. (石黒毅(訳) 一九七〇 「ステイグマの

社会学」せりか書房)

Laing, R. D., 1960, *The divided self: An existential study in sanity and madness*. Tavistock Publications. (阪本健二・志貫春彦・笠

原嘉(訳) 一九七一 「引き裂かれた自己」みすず書房)

## 聞き取る体験

ここまでは、これまでに私が講義などの場で行なった調査に関する教育実践の一つを紹介したい。〈厚生労働省委託〉(社) 日本介護福祉士養成施設協会主催の介護教員講習会「研究方法」(札幌ガーテンパレス、二〇〇三年八月七〜九日) で実践した質的研究の演習でのやり取りである。

私よりも年齢の高い受講者が多かったこの講習会では、まず二人一組になっていた。その際に、同じ職場の方が組むことがないようにお願いした。話しづらかったり、講習会以降の仕事に支障が生じないための配慮である。さらには、自らの職場とは異なる世界の方の話にじっくりと耳を傾けていた良かったからでもあった。これは、生活史に関する講義で説明を行なった後で、実際に生活史の聞き取りと記述を実践してみるといってもであった。二人一組になっていた後、まず話し手と聞き手を決めていただく。そして、話し手は聞き手の質問に答え、聞き手は話を聞きながら、メモを取り、話し手の生活史を頭の中に描いていく。可能な限り時間を取りたいところだが、お互いに話し手と聞き手の役割を交替して、両者がどちらも体験できるような時間配分にする。

自らが記述したメモをもとに、相手の生活史を可能な限り細かく文章化していく。ここでも可能な限り時間を取りたい。完成したら、お互いに書かれた生活史を交換し、じっくりと目を通す。その上で、著しい誤りや誤解、それから納得しがたい記述等に赤ペンで下線をひいていくという作業を行なう。その上で、お互いに下線が引かれた箇所に対して説明を行なう。

最後に、実際に行なってみて浮かび上がった生活史に関する疑問点や生活史を聞く上で注意すべき点を記述してもらおう。もし時間の余裕があれば、講師は生活史に関する疑問に答えるべきであろう。

注意すべき点は、以下の通りである。①話し手は聞かれたことに対して必ず答えなければならぬというわけではないということ徹底すること。②自らが話したくない話は聞かれても話すことはなく、聞き手もそれ以上は質問しないというルールを徹底すること。

そして、③完成した相手の生活史はその本人に最終的に手渡すこと。その後どうしようとも本人の自由であるが、必ず本人に手渡すようにしてほしい。そして、本人自らが他者からどのようにまとめられるのかということを考える際の資料として用いてほしい。

このようなワークショップが大学の講義の場で可能か否かについてはやや疑問である。なぜなら、大半が青年期の受講者であり、見ず知らずの人にある種の自己開示を果たして行なうのがどうか（ゼミ内でも「あの人」などという表現が用いられる場合さえある）。さらには、自己開示しようとも、他者に伝えるための「自らを語ることは」を持ち合わせているのかどうか……。それは受講者である当事者の問題というよりは、現代の日本社会が抱える問題によるのではないかとも思う。

第三章  
フィールドでの恋愛

---

第2章で論じたように、対面式の聞き取り調査やフィールドワークにおいては、人と出会うことになる。人と人が出会うことになる、中にはどちらかが恋愛感情を抱くことになる場合もあるだろうし、恋愛関係に至ることになる場合もあるだろう。

本章では、これまで不思議なことに、ほぼまったく語られてこなかったフィールドワークにおける恋愛について述べていく。フィールドワークにおける倫理という側面ではなく、調査報告や結果を読む側の視点から考えてみたい。

---

## はじめに

忘れられない論文がある。その奇抜なタイトルが忘れられないこともあるが、文中に見られる人間関係の独特の感触が忘れられないのだ。その論文とは、橋本裕之氏の「ストリップについてお話しさせていただきます」である（橋本一九九三）。この中で、著者の橋本氏はある踊り子さんとのやり取りを回想して記述している。その箇所を引用しよう。

めぐみちゃんがいよいよやながらも、都内のあるストリップ劇場に出演していたとき、舞台がはねてからふたりで未明まで飲み続けたことがある。すっかり酔っぱらったぼくは、誘われるままに彼女が十日間だけ寝泊まりすることになっている寮（といってもワンルームマンションの一室である）に転がりこんだ。しばらく休ませてもらおうつもりだったのである。どちらからともなく「アイスクリーム、食べたくない？」ということになり、坂の途中にあったコンビニエンスストアで、昔ながらのアイスクリームを二つ買った。

アイスクリームを食べながら何を話したのか、もう忘れてしまった。けれども、にわか用をたしたくなってトイレを借りたことだけは、はっきり記憶に残っている。トイレから出てきたら、がらんとしたワンルームマンション、まるで生活のにおいがしない部屋で、ごくふつうの女の子がごくふつうに寝そべっていた。そんな平凡な女の子がひとり、ぼくの前からいなくなった。ただそれだけのことである。（橋本一九九三、四八九頁）

さて、ここから私たちは、この両者の関係をどのように見なすのだろうか。「これはフィールドワークではない」と肩をひそめる方もおられるかもしれない。あるいは、「対象者」と近付き過ぎていゝ」とその関係性を批判される方もおられるかもしれない。ある人は、この女性がこの著者に恋心を抱いていたのではないかと推測するかもしれない。逆に、ある人は、著者がこの女性に恋心を抱いていたのではないかと推測するかもしれない。単なる一読者である私たちにはわからない。この論文の文章、さらにはまさに行間から読み解いていくしかない。しかし、私たちには手がかりがまったくないわけではない。この著者によってなされた先の記述から、私たちはなにがしかのを感じることができると

もしれないのである。

ここで、私は読者の皆さんと共に、上記の文章の解釈を競い合おうというのではない。上記の文章からほのかに感じられる感触や心の機微といった身体的な感覚を伴うかわりとフィールドワークおよび社会調査について、本章では述べていきたい。このことをより切迫した事象としてとらえるために一つの問題をあえて呈示しよう。

もしフィールドワーカーが、フィールドワークで生じる人間関係において、恋愛の当事者になった場合はどうすればいいのだろうか。

より具体的に述べるならば、フィールドワーカーであるあなたが現在行なっている最中のフィールドワークにおいて、研究の「対象」とされている人のうちのある人物があなたのことを恋愛の対象としている、もしくは好意を抱いている場合はどうすればいいのか。もしくは、その逆で、フィールドワーカーであるあなたが現在行なっている最中のフィールドワークにおいて、研究の「対象」とされている人のうちのある人物のことを恋愛の対象としている、もしくは好意を寄せている場合はどうすればいいのか。このような問題を呈示してみたい。

「私は同性の人にしか話を聞かないので大丈夫」と早々に考える読者の方もおられるかもしれない。しかし、その発想は現実の世界の一部にしか通用しないであろう。あなたの住んでいる世界は異性愛者のみが生活する世界ではない。たしかに異性愛者は数多いかもしれないが、多様なセクシュアリティをもった／もたされた人たちが一緒に生活する世界である。たとえばま本書を読んでおられるあなたが異性愛者であろうとも、そして、それを過剰に周囲に誇示していても、異なるセクシュアリティの人の恋愛対象には決してならないとはい切れはしない。このフィールドでの恋愛をめぐる問題から逃れられる人は一人もいないということを確認した上で、この問題に向き合うことにしたい。

とは言え、このような問題そのものが生じるはずはない。そのように頑なにおっしやる方もおられよう。上記の「フ